

いては芸術はできない、とは言うものの、ヤング・アーティスト達の生活内情はかなり深刻である。

## 暗譜の秘訣

「音楽的才能」と一口に言っても、その中には音感やリズム感などの基本的な事柄をはじめ、敏捷な運動神経その他の色々な要素が含まれるだろう。それに加え、実際の演奏活動の場においては記憶力の確実さ——いわゆる「暗譜力」——も欠かせない。ソリストとしてオーケストラと協演する際、一人で、またピアノなどの伴奏と共にリサイタルを催す際、オペラの舞台で、等々慣習や芸術的観点より楽譜なしで演奏したり歌ったりしなければならぬ機会が非常に多い。

三人以上のプレイヤーが集まって合奏する場合には、休符を数え間違えたりする事によって起こり得る単純ミスを防ぐ面からも、各自譜面を使用して演奏するのが普通である。この場合演奏者はそれぞれ自分のパート譜のみを見て演奏しており、譜面上からはどの部分で誰がどんな音を出すかは不明である。

これはオーケストラのような大編成のものでも同様で、特に休みの部分の多い管楽器や打楽器の奏者にとって、指揮者の存在は必要不可欠である。もし指揮者がいなければ、しばしば百小節以上も続くことのある休止を、その小節数だけ指折り数えながら待たなければならなくなる。

小編成の室内楽でピアノが使用される場合、ピアノリストだけは全部のパートののっている総譜を使用して演奏する。ただ編成が増えれば増えるほど譜めくりの回数が多くなるのが難点ではある。ピアノの大譜表だけならページに六段はゆくに印刷できるのに、パートが増えたとページに四段、あるいは三段分ぐらいしかスペースがない。単純計算で一段四小節として、四十八小節ごとに譜めくりが必要になると二十四小

節ごとになるのでは、そのせわしさに差が生じる。

歌手の場合には歌詞を覚え込むまでがひと仕事である。特に日本人は母国語以外の言語で歌わねばならない場合が多く、皆それぞれ苦労している。それに加え、同じオペラでも劇場によっては違う言語で上演される事が少なくない。モーツァルトのオペラなどイタリア語とドイツ語、運が悪いとその上日本語でも覚える必要に迫られる事があり、数時間かかる出し物を違う言葉で記憶しなおす苦労は並み大抵ではない。その上それをとちらずに最後まで歌うには、その記憶力もさる事ながら、ステージの上であがりたりしない強靱な神経も必要であろう。

器楽奏者がその楽譜を暗記する方法もさまざまである。暗譜における才能も存在するようである、全く何の苦労もなく曲をすぐ覚えられる人もいるが、普通は次の三つのタイプに分けられるだろう。

第一には譜面を視覚的、つまり写真のように覚え込み、演奏中あたかも目前に譜面が存在するかの如く感じられる人。この能力が研ぎ澄まされると譜面上の音符ばかりでなく、書き込まれた指使いはもとよりいろいろな注意事項、果ては紙の汚れやしみまで脳裏に浮かんでくるそうである。前述の暗譜の天才にはこのタイプの人が多い。

第二には耳で音を追い、そのバランスや音色を感覚的に覚えていく人。頭の中でその瞬間に鳴っている音をチェックし、次の音やメロディーの感じを想い浮かべつつ、それをたどっていく。

第三は練習に練習を重ね、身体に演奏中の動きを細部に至るまでパターン化して覚え込ませるタイプ。完全に暗譜するまでに時間はかかるが、ステージであがってしまえば、自分自身をコントロールできなくなったような場合でも、比較的活路を見出させる。「カーッとしてしまっただけで何もわからず無我夢中になり、気がついたら終わっていた」という状況は、練習を通じて身体に覚え込ませた動作を、無意識のうちにも反射神経の働きで切り抜けているわけである。これは演奏家にとって冷や汗、脂汗の苦渋に満ちた時間であるが、人

前で演奏する事の難しさを改めて認識させられる貴重な体験となる。

一般的にはこれらの三つのタイプが適当に混ざりあって各自のシステムができ上がっているが、いずれにせよ暗譜の訓練はなるべく早い時期、できれば子供のうちから始めるべきであろう。

## 主役が来ない！

九月はじめから六月末までのシーズン中、ウィーンではシュターツオペー（国立歌劇場）はもとよりフォルクスオペー、テアター・アン・デア・ウィーンその他の劇場でほぼ毎日休むことなく公演が行なわれている。更にこれと並行して、規模の大小を問わずに催される連日のコンサート、その上ブルクテアターなどにおける演劇、等々盛り沢山の催し物が目白押しである。

こうしたいくつもの劇場やコンサートホールが、常に満員とはいかなくとも結構な数の観客・聴衆を動員している事実は驚くべきものである。一国の首都とはいえどもウィーンはそれ程特別に大きい都市ではない。何といってもオーストリア全体の人口が東京都のそれ以下である。ウィーンを訪れる観光客がいかに多いといっても、その全員が芸術ファンとは言いがたい。それにもかかわらぬ連日の盛況ぶりを眺めていると、こんな所にもウィーンの古くから積み重ねられた文化的伝統の深さが感じられる。

こうして毎日上演される作品は、テレビや映画とは異って常に「ライヴ」であるため、そこには出演者の疾病など、一連の不可抗力による予想外の事態が起こり得る一方、それに最大限対処できるだけのシステムも準備されている。身近な例として、オペラの場合はどうなるのだろうか。